連載

市長室からこんにちは

vol. 74

益田市長
山本 浩章

郷土の誇る世界的医学者・秦佐八郎は、明治6年に島根県美濃郡都茂村（現在の益田市美都町都茂）で生まれました。生家の山根家は裕福な庄屋でしたが、14歳のとき、代々村医者だった親戚の秦家の養子となりました。実の両親にとって、幼少期のいたずらに手を焼きながらも目の中に入れても痛くない八男・佐八郎がいなくなることは、言い知れぬ寂しさがありました。しかし、医者の家を継がせることがその才能を最大限に活かす道と考えたのです。

18歳で第三高等中学校医学部（現在の岡山大学医学部）に入学すると、同級生はおろか教授たちも舌を巻く秀才ぶりを示します。佐八郎の試験答案を採点していた担任が、自分も知らない知識が書かれていたのを不審に思い、図書館で調べてみると、果たして外国の最新論文の的確な引用だったことがわかったのです。卒業後は岡山の病院に勤務しますが、徐々に研究者としての前途を嘱望されるようになります。

このような岡山における佐八郎の抜群の成績と評判は、秦家や都茂村の人々にとって誇りである一方、不安の種でもありました。せっかく得た村医者の跡取りには一日も早く郷里で診察にあたってほしいというのが本音だったからです。折しも養父が早逝すると、佐八郎の帰郷を求める声がさらに高まります。しかし最終的には養祖父自ら、医学研究での貢献こそ家や郷土の最高の名誉として研究の道に進むことを容認したのです。この寛大な判断は、医家としての秦家の断絶を伴うものでした。

こうして25歳にして上京が叶い、北里柴三郎が所長を務める伝染病研究所（現在の東京大学医科学研究所）に入所しました。同僚には野口英世や志賀潔がいました。入所の翌年に神戸で、その2年後に和歌山で、死亡率の高いペストが相次いで流行すると、自ら現地入りし治療と予防にあたりました。その経験を綴った12編の論文は後に一冊の本にまとめられ、ペスト対策の決定版として長らく重宝されました。

危険を恐れぬ沈着な仕事ぶりは、佐八郎の評価を大いに高め、次の新天地への雄飛につながります。

益田市の歴史文化の特色（全7回）

第6回　日本海に漕ぎ出した益田の人々

【問い合わせ先】
市文化財課　☎31-0623

益田の人々は、縄文の昔から日本海に舟を漕ぎ出し、国内外の様々な地域と交流・交易を展開していました。

匹見の縄文遺跡群からは、大分県姫島産の黒曜石製の鏃や新潟県糸魚川産の翡翠製棗玉などが出土しています。すでに当時の益田がこれらの地域と交易により結びついていたことを示しています。沖手遺跡（久城町）の縄文時代晩期の地層からは、丸木舟が出土しました。この丸木舟が実際に日本海を渡ったかはわかりませんが、当時の益田の人々がその手段を持っていたことは確かです。

豊田神社（横田町）の奥の院石塔寺権現から出土した陶製経筒五口や、東仙道土居遺跡（美都町仙道）から出土した四耳壺からは、中世前期の中国との交易による結びつきがうかがわれ、これらと同時代の交易拠点であったと考えられる沖手遺跡成立の背景として注目されます。また、兵庫県の六甲や福井県の日引などからもたらされた中世の豊富な石造物は、益田が交易の重要拠点であったことを示しています。

これら縄文以来の日本海・東アジア交易の流れを汲み、益田が大きく繁栄したのが中世益田氏の時代です。益田氏は研究者から「海洋領主的性格」が指摘されていますが、それを証明するかのように、日本の中世の港町の遺跡を代表する中須東原遺跡（中須町）が発見されました。同遺跡は遺構・出土品ともに全国屈指の内容を誇ります。益田氏の「海洋領主的性格」は、益田の人々の積極的な交流・交易に支えられたものと考えられています。

そして、それらの交流や交易は益田氏が去った後も続き、西廻り航路の盛況の中で、今市（乙吉町）が繁栄したほか、高津や飯浦が津和野藩の重要な港に位置づけられました。

提灯と大漁旗をつけた櫂伝馬船とご神船が、男衆のかけ声とともに高津川に漕ぎ出す船神事「ホーランエー」。豊漁・安全祈願とも、北前船を迎える様子を再現したともいわれます。